D−10 児童の生活構造の時代的変遷に関する研究〔第2報〕（その1）幼児の生活空間

大妻女大家政 ○大竹智恵子 平井信義 山本キク

目的：急激に変化していく社会の中で，児童の生活構造がどのように変化してきたかを知るために，昭和47年に都市および都市化の進んでいる地域の児童を対象として，実態調査を行ない多くの知見を得ることができた。それについては第1報として，昨年の家政学会で報告した。今年は，過疎化の進んでいる秋田県下の3ヶ村を対象地域として，過疎地域における児童の生活を衣食住，保育，教育，家族関係，経済の各方面から実態調査をして，その生活構造を明らかにし，今後における過疎地域の児童の家庭生活に対する対策を確立することを目的としている。第2報として，過疎地域の児童の生活の実態についてその1～その4を報告する。　方法：調査地域は，過疎化のいちぢるしい秋田県下3ヶ村。対象児の選定は東京での調査と同様，核家族・5才児・長子の条件を考慮したが，上記の条件を持つ対象児が極めて少数であるため，5才および6才，核・複合家族，長子であることとし，97世帯を得た。調査期日は昭和47年11月5日～11月7日の3日間。調査方法は，面接質問法（大項目17，小項目70）

調査結果：幼児の生活空間を「生活の場」からとらえると，家庭・保育所・遊び場に大きく分けることができる。保育所へは83％が通い，60％は徒歩で通園している。所要時間からみるとかなり遠方から通園している。主な遊び場所は，自分の家の屋内36％，広場・遊園地・空地等は9％であった。これは調査時が冬期であったため屋内が多いと思われるが，道路事情の改善に伴う交通量の増加が地域の安全性に影響を与えていることを知った。